

韓国文学セレクション

# 資本主義の敵

チョン・ジア

橋本智保 訳

新泉社



# 자본주의의 적

정지아

The Enemy of Capitalism

by Jeong Jia

Copyright © 2021 by Jeong Jia

All rights reserved.

Originally published in Korea by Changbi Publishers, Inc., Paju.

Japanese translation copyright © 2025 by Shinsensha Co., Ltd., Tokyo.

Japanese edition is published by arrangement with Changbi Publishers, Inc.  
through CUON Inc., Tokyo.

This book is published with the support of  
the Literature Translation Institute of Korea (LTI Korea).

Jacket design by Y.A.S.

Illustrations by ISHISAKA Goro

## 目次

資本主義の敵	007
文学博士チョン・ジアの家	041
黒い部屋	069
私たちはどこまで知っているのか	093
階級の完成	121
アトランタ・ヒップスター	143
母猫を捜すもの悲しい子猫の鳴き声	169
存在の証明	191
アハ、月	217
編註	237
初出一覧	240
作家のことは	242
訳者あとがき	241

装画・扉絵  
イシサカゴロウ

## 訳者あとがき

『資本主義の敵 (자본주의의 적)』(チャンビ、二〇二二年刊)は二〇一四年から二〇二〇年にかけて書かれたチョン・ジア(鄭智我)の短編をまとめた作品集で、本書はその全訳である。

初期の短編集『歲月』(原題は『春の光』、二〇〇八年刊／拙訳、新幹社)と、韓国の文学界に絶大な反響を呼んだ長編小説『父の革命日誌』(原題は『父の解放日誌』、二〇二二年刊／拙訳、河出書房新社)のちよūd中間に書かれたものだ。チョン・ジアの小説の邦訳は、本書が三冊目となる。歲月とともに変わりゆくチョン・ジアの文学世界を、こうして日本の読者と分かち合えることを嬉しく思う。

まず、チョン・ジアの作品に一貫して流れているものについて考えてみたい。

一つは、両親がパルチザンであったこと、それによって娘であるチョン・ジアの人生が決定づけられたことが挙げられる。

チョン・ジアの父はかつて南朝鮮労働党(남조선노동당)の全羅南道党组织部長であり、母は南部軍政

治指導員であった。父は長い期間にわたって収監され、娘のチョン・ジアは軍事独裁政権下で多感な時期を送った。しかも「連座制」という名のもとに、国家がその家族だけでなく遠い親戚に至るまで、個人の自由を奪い、夢を見ることを許さなかった時代が長く続いた。

パルチザンについて簡略に説明すると、日本の敗戦に伴う解放後に一九四八年の南北分断を経て朝鮮戦争期まで、米軍政と李承晩政権<sup>イスンジャ</sup>に抗し、山岳地帯に潜伏して遊撃戦と呼ばれるゲリラ闘争を展開した共產主義武装組織を指す。一九四八年十月十九日、全羅南道の麗水<sup>ヨス</sup>に駐屯していた朝鮮国防警備隊十四連隊所属の軍人二千人余りが、済州島<sup>チユジュド</sup>の蜂起（済州島四・三事件）を鎮圧せよという李承晩政権の命令を拒み、叛乱は隣の順天<sup>スンチオン</sup>にも及んだが、これを鎮圧する過程で大勢の民間人が犠牲になった。南労党を中心とした叛乱勢力の残兵は山岳地帯にたてこもり、智異山<sup>チリサン</sup>を拠点に激しいパルチザン闘争を行った。チョン・ジアの両親はその組織の幹部だった。彼らは南北分断を阻止しようとし、労働者、農民の解放を叫び武装闘争を続けたが、ほとんどが討伐され、チョン・ジアの両親は数少ない生存者である。

もう一つは、両親の故郷であり、チョン・ジア自身が生まれ育ったところでもある、全羅南道の求礼<sup>クレ</sup>が、多くの作品の主な舞台になっていることである。

両親の足跡をたどるノンフィクション的な長編作『パルチザンの娘』（一九九〇年発表）によって一躍その名を世に知らしめた数年後、小説家としてデビューを果たしたチョン・ジアは、短編小説という形式の中で両親の記憶を掘り起こし、積み重ねながら、その存在論的な問いを求礼とい

う土地と結びつけて描いてきた。『歳月』に収録された彼女の作品には自伝的な要素が色濃く反映されており、分断国家がもたらしたイデオロギーに苦しむ登場人物たちは、その連鎖から逃れることができず、むしろそれによつてのみ自己の存在を証明しうるかのように描かれている。求礼は智異山の麓に位置する町であり、パルチザンが凄惨な闘争を繰り広げた舞台でもある。彼女にとっては決して懐かしむ対象ではなかった。

ところが『資本主義の敵』を読んだとき、彼女の文体に明らかな変化が起こっていることに驚いた。依然として求礼に暮らす元パルチザンの両親が題材になっているが、本書に収録された作品はどれも著者とよく似た語り手によつて紡がれた虚構の物語だった。さらに特筆すべきは、『歳月』の時代には見られなかったブラツクユーモアが随所に見られる点だ。

チョン・ジア文学の本領ともいえる四作「資本主義の敵」「文学博士チョン・ジアの家」「黒い部屋」「私たちはどこまで知っているのか」を見ても、軽快な語りで人物がユーモラスに描かれており、とりわけ「文学博士チョン・ジアの家」では、実名を挙げながらの風刺的描写がなされている。これは『父の革命日誌』にも色濃く引き継がれている点である。もちろん、こうした作風の変化は、月日が流れ、もはや若い世代にとってはパルチザンなど聞いたこともない時代になったからでもあるが、著者が求礼の地で暮らすようになったことと深く関係している。

十数年前、チョン・ジアは長らく離れていた求礼に引越した。父の死後、高齢となった母親の面倒を見るために数年だけ戻るはずだったが、その生活は現在も続いており、求礼は彼女の文

学世界において重要な小説空間となった。母の家の向かいにある家で暮らしながら、かつて強靱な革命家であった母が老いていく姿を描き、生命の循環とその寂しさを綴ったのが「黒い部屋」である。彼女が暮らしている家の裏にはかつて父が活動した白雲山<sup>ベグンサン</sup>があり、居間から見える山は母が活動した智異山だ。求礼には、過去の記憶を抱いた物語が幾層にも重なって染みついている。チヨン・ジアは言う。かつて銃を向け合った人々が、いまは隣人として暮らしている求礼という町は、奇妙な縁が蜘蛛<sup>くも</sup>の巣のように絡まり合った、小さな監獄のような場所であると。両親がパルチザン闘争に身を捧げたのは五、六年ほどの期間にすぎない。だが、その後の長い年月を、彼らは過去の記憶に抗うこともなく生きている。著者の人生も、隣人たちの人生も、そうやっていまなお続いているのだ。

彼女が自分はさまざまな人間関係の連鎖の中で生かされていると思うきっかけとなったのは、父の葬儀だった（父の葬儀を小説にした『父の革命日誌』もあわせて読んでいただけたら幸いだ）。父の死を悼む人たちの中には、生前の父をアカと呼んだ者もいれば、貧しかった父に心から同情し、手を差し伸べた者もいた。彼らが語る父の思い出は、娘である著者の知らないものばかりだった。そのとき、彼女は自分の傲慢さに気づかされたという。自分の悲劇は、両親がパルチザンだったからではなく、もっと何かを手に入れたという終わりなき欲望のせいだった。求礼に暮らす隣人たちもまた、それぞれ異なる物語を抱えて生きている。他者の声に耳を傾けること、多様な存在のありようを見つめる眼差しこそが、この短編集に見られる変化なのではないか。

本書には一見、異色とも思える作品も含まれている。例えば「アトランタ・ヒップスター」では、激しい競争社会から取り残されたことによる寂しさと、それと表裏一体の自由さが描かれている。豊かな自然に囲まれた求礼には、ソウルの生活にないものを求めて帰農した人も少なくない。そうした土地だからこそ書かれた物語でもある。「アハ、月」は自然や生命がもたらすインスピレーションに導かれて書かれた作品だといわれている。また「存在の証明」では、一般の読者には馴染みのないマニアックな商品名がこれでもかというほど登場する。コーヒーや家具やSNSなど、本来なら人間のアイデンティティを証明できるはずがないのに、そこに安堵している人物像を通して、物質が存在を証明できるのかという問いを投げかけている。「母猫を捜すもの 悲しい子猫の鳴き声」や「階級の完成」といった作品には、資本主義社会の中で熾烈な戦いを強いられる人間の姿が、風刺的に描かれている。

チョン・ジアの愛読書であり、韓国文学史において重要な位置を占めている作品に、<sup>イムン</sup>李文求の『<sup>クア</sup>冠村随筆』がある（邦訳は安宇植訳、インパクト出版会）。この作品は一九七〇年代に書かれ、植民地時代から独裁政権期に至る歴史の中で、<sup>チン</sup>忠清道<sup>チンド</sup>の農村に生きる人々の内面を深く洞察したものであり、パルチザンの息子でもあった李文求による自伝的小説ともいわれている。チョン・ジアがこの作品に惹かれる理由の一つは、観念的な言葉を一切使わずに人間を平等に描いている点と、また、善人でも悪人でもない立体的な人間像、それこそが彼女の目指す文学に通じるものであるからだろう。どうかすると非現実的なヒューマニズムだと思われがちだが、こうした眼差し

こそ、いまの時代を生きていくための力となる物語なのではないか。小説とは人間をどのように見つめるかに対する一つの答えである、とチョン・ジアは語っている。矛盾と挫折が幾重にも染みついた冠村ならぬ求札クレンという土地で、今後も彼女はその答えを模索し続けていくだろう。「パルチザンの娘という衣を脱ぎ捨て、リアリズムも脱ぎ捨てて、軽やかに、このうえなく軽やかに、羽のごとく風のごとく、どこまでも自由に飛んでいきたい」(本書九頁)というチョン・ジアの次なる作品に期待したい。

最後に、『資本主義の敵』の日本語版出版を快く承諾してくださり、編集にあたられた新泉社の安喜健人さん、そして支えてくださったすべての方々に、心から深く御礼申し上げます。

二〇二五年八月

橋本智保